

農林水産大臣賞受賞

地域ぐるみで棚田を守る。そして、世界に向けて棚田の魅力発信!!

しょうどしまちょうなかやまたなだきょうぎかい
受賞者 **小豆島町中山棚田協議会**
(香川県小豆郡小豆島町)

■ 地域の沿革と概要

小豆島町は、瀬戸内海国立公園に浮かぶ小豆島の中央から東に位置する、総面積 95.59 km²、人口約 13,500 人の海と山の美しい自然に恵まれた町で、平成 18 年 3 月 21 日に旧内海町と旧池田町が合併して誕生した。

また、日本におけるオリーブ産業発祥の地や、壺井栄の小説を基にした映画「二十四の瞳」の舞台として知られている。

地場産業は、醤油、佃煮、素麺などの食品産業が中心で、このほか、キクやオリーブなどの農業、大坂城築城からの歴史を有する石材業、豊かな観光資源を生かした観光関連産業やオリーブ製品の製造業も盛んである。

特に観光地としては、「世界の持続可能な観光地 TOP 100 選」に選ばれ、国際的に認知されている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

小豆島のほぼ中央の中山間地域に位置する中山地区は、県内で唯一「日本の棚田百選」に選ばれた中山千枚田を中心に、奥深い山々や初夏には蛍が舞う美しい清流、そして点在する民家で構成され、「美しい日本の歴史的風土 100 選」や「にほんの里 100 選」の一つに数えられるなど日本の原風景が残る地域である。



写真 1 中山地区

千枚田にもたらされる水は、「日本の名水百選」にも指定された干ばつ時にも涸れることのない貴重な湧き水で、この水源を利用して古くから棚田による稲作が行われてきた。中山千枚田での米作りは、保水や生態系の保全、景観の維持だけにとどまらず、「中山農村歌舞伎」や「虫送り」などの伝統や文化が蓄積されている地域文化の軸となっている。

また、平成 16 年には、平成天皇皇后両陛下が御視察されている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

地域の過疎化・高齢化が進むにつれて、棚田ゆえの労働生産性の低さによる離農が増加して棚田の荒廃が進行し、平成 24 年頃には約 3 割が耕作放棄地となった。

荒廃田の増加は、里山の景観を損ない、水の循環機能を低下させ、農作業効率のさらなる悪化を招くとともに、鳥獣被害の増加も助長させた。さらに、担い手不足の問題は、棚田だけではなく、約 300 年続く地域の伝統芸能である「中山農村歌舞伎」の伝承にも影響を与え、「虫送り」に関しては、完全に途絶えてしまった。

中山地区の景観や伝統行事は、営農活動としてだけではなく、観光としての価値も高く、多くの観光客を魅了してきたが、その源である中山千枚田をいかに守り続けることができるかが課題となっていた。

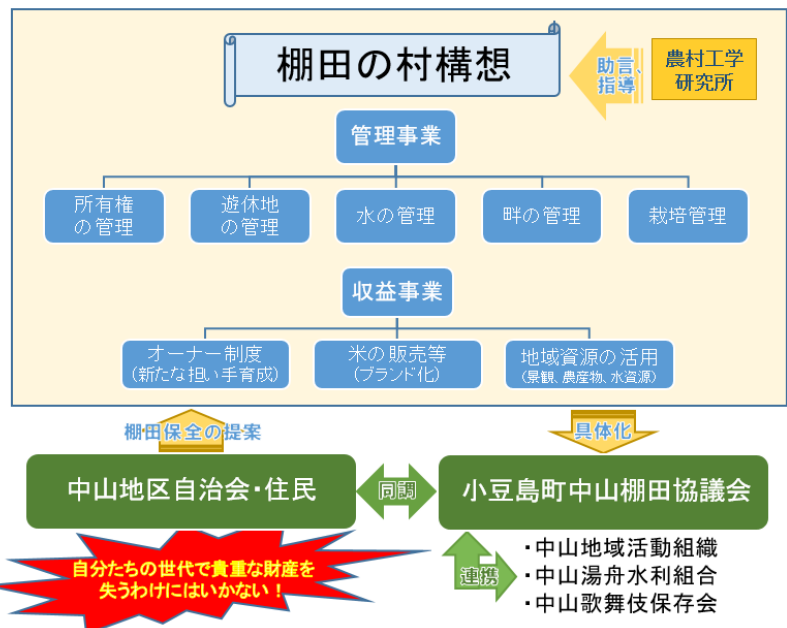
そこで、中山千枚田の将来を危惧した地域住民は、先人たちが築き守ってきた棚田と、棚田を中心に培われてきた貴重な文化や伝統

を後世へと残していくために、行政や農村再生に関する専門家と協力し、棚田の現状調査や意向調査、保全活動に向けたワークショップを重ね、「棚田の村構想」を打ち立て、その具体的な取組主体として、平成 25 年に小豆島町中山棚田協議会を発



写真2 千枚田を守るためのワークショップ

第2図 棚田保全の提案と「棚田の村構想」への取組



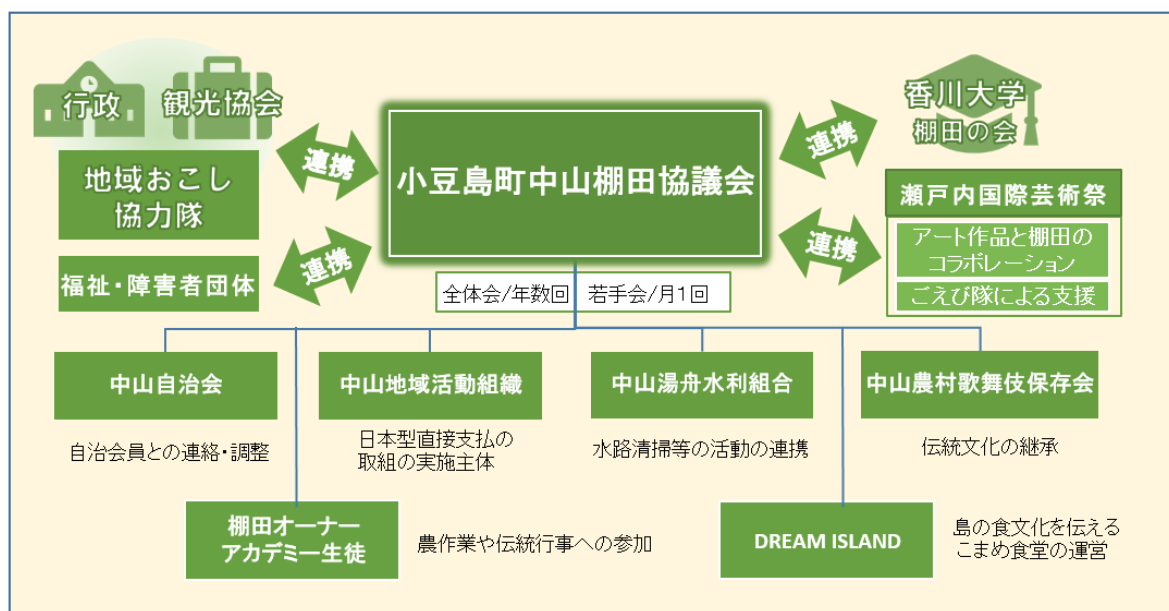
足させて、さまざまな保全活動を通じて歴史文化を後世に継承することとした。

(2) むらづくりの推進体制

地元の自治会、水利組合、地域活動組織、農村歌舞伎保存会に加え、行政の支援を受け、官民一体となって活動がスタートした。活動の一環として、日本とインドネシアの6つの大学による農業体験プログラムの受け入れや地元の大学生との交流も行っている。そこで、学生たちは、棚田での農作業や農村歌舞伎などの伝統行事の体験を通して、棚田を中心とした持続可能な地域社会について地元住民と一緒に考え、行動していく「棚田の会」を立ち上げ、連携協力する体制が整った。

行政も地域おこし協力隊を新たに配置し、一層関係性が深くなっている。

第3図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

中山地区は、日本の棚田百選のほか、日本の名水百選、美しい日本の歴史的風土百選、島の宝百景、にほんの里100選、世界の持続可能な観光地TOP100選に選定された、本県にとっても、また日本や世界にとってもかけがえのない宝ともいえる棚田地域の一つである。

文化や伝統の源である千枚田を守るため、小豆島町中山棚田協議会においては、荒廃田の再生を図るための現状と課題を正しく認識したうえで「棚田の村構想」を実現すべく、地域住民が協力し合い、小豆島町と歩調を合わせて景観も含めた棚田の保全活動を進めるとともに、国や県の補助事業を活用した農道や水路の整備、耕作機械の導入、耕作放棄地の再生などの取り組みになっている。

香川大学農学部の棚田の会や地域おこし協力隊による活動支援、棚田オーナー制度や棚田アカデミーによる耕作者の確保、地元の酒造会社と連携した酒米の耕作・地酒づくり・販売、こまめ食堂と連携した棚田米メニューの提供など、地域再生に向けての的確な対策を常に検討しつつ実践できる自走体制が整っていることは特筆すべき点である。

2. 農業生産面における特徴

(1) 国の補助事業等を活用した保全活動

「棚田の村構想」の実現に向けて、中山間地域等直接支払制度による、集落営農組織（中山湯舟水利組合）と連携した農作業の効率化や農道・水路、協定外の耕作放棄地の保全に、第1期から継続して取り組んでいるほか、中山間ふるさと水と土保全対策事業による、農業用排水路等の管理や周辺環境整備と小学生等を対象とした環境学習の実施、深刻化する鳥獣害から地域を守る集落柵の設置、さらには、県と町が連携し、県の補助事業を活用した狭小な水田に適した小型機械の導入など、国・県・地域住民が一体となって棚田の保全活動に取り組んでいる。

これらの取組により、約3割あった耕作放棄地が1割減少（利用状況調査結果R3.11実施）した。

第1表 国の補助事業等を活用した保全活動

中山間地域等直接支払制度（中山地域活動組織） 平成12年度第1期から取組
中山間ふるさと水と土保全対策事業 （棚田地域等保全活動支援事業） 平成17～19年度に取組
多面的機能支払制度（中山集落活動組織） 平成27年度第1期から取組（制度は26年度から）
中山間地域総合整備事業池田地区 平成30年度から取組
「人・農地プラン」の実質化 令和2年度から取組
みんなで守る地域農業支援事業 令和3年度整備

(2) 学生参加による活動支援と棚田オーナー制度による耕作者の確保

大学生によるボランティア活動の受け入れや、町内の小中学校、福祉・障害者団体等の棚田耕作体験の支援により、棚田での耕作が地域の活力づくりにつながり、耕作放棄地対策にもなっている。

また、平成26年度からは、棚田オーナー制度を導入し、耕作者の確保を図るとともに、中山農村歌舞伎、虫送りなどの伝統行事に参加して、参加者に棚田の魅力を発信してきた。しかしながら、令和2年度からは新型コロナウイルス感染拡大防止対策により中止し、新たな取組を検討し、令和4年度からは棚田アカデミーを実施し、棚田耕作者の育成に取り組んでいる。



写真3 棚田耕作体験（稲刈り）

(3) 担い手育成の取組

担い手の育成に当たっては、令和2年度から「人・農地プラン」の実質化に取り組み、地区内へのアンケートにより担い手の有無など農業の実態調査を行い、農業者が話し合いを行うことで、地域農業における中心経営体、地域における農業の将来の在り方などを明確化し、町より公表した。

さらには、令和3年度、棚田の活性化を目的とした地域おこし協力隊1名を採用し、実際に棚田で耕作をしながら地元若手農業者と意見交換をして、棚田の活性化の検討を進め、令和4年度からはさらに1名、棚田の保全活動を主とした地域おこし協力隊を採用した。



写真4 地域農業について座談会

(4) 学校・観光業者を通じた農産物の販売

収穫した米は、地元の小中学校の給食やホテル等の観光業者に提供するほか、棚田米から作ったアイスをふるさと納税返礼品とし、収益性を高めるとともに中山千枚田をPRしている。



写真5 給食風景(左)と棚田アイス(右)

(5) 島の食文化を伝える「こまめ食堂」

こまめ食堂は千枚田のまん中あたりにある、島の食文化を伝えるお店。

食堂はかつて地域の精米所だった建物で空き家になっていたが、地域資源の有効活用と活性化のためにと所有権を中山地区自治会が譲り受け、特定非営利活動法人 DREAM ISLAND が運営している。

元々は2010年に開幕した「瀬戸内国際芸術祭」のオフィシャルショップとしてつくったお店だが、その後、リニューアルして食堂としてオープンした。

看板メニューの棚田のおにぎり定食。棚田で手間暇かけて育てたお米を、氷結水+直火でふっくら炊きあげ、昔ながらのやり方で手作りしている。



写真6 棚田米を使った「おにぎり定食」

(6) 6次産業化（酒造会社との連携）による地酒づくりに挑戦

地元酒造会社と連携して、日本酒の原料となる酒米の作付を平成27年度から行っており、休耕田の解消・予防を図るとともに、収穫した酒米を使って醸造した酒を小豆島の地酒として販売している。

棚田米を原料とした日本酒「はちはち」は、一般的な日本酒に比べて削りが少ないために、口に含むとお米の味がしっかりと感じられ、お酒の色もきれいな山吹色をしている純米酒である。6次産業化の面においても中山千枚田の魅力



写真7 棚田米を原料とした日本酒

を国内外へ発信している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 小豆島町の文化を継承する農村歌舞伎

江戸時代の天保年間以前に建築されたと伝えられている「中山の舞台」で、五穀豊穰奉納を目的に「中山農村歌舞伎」が毎年行われ、地元の子供から大人まで多世代によって役者から裏方までを担っており、上演の際には、郷土料理である「わりご弁当」を持ち寄り、食され賑わっている。



写真8 伝統行事「中山農村歌舞伎」

平成26年度には、棚田オーナーも役者として参加し、大学生については、SUIJI（海外の3大学と香川大学ら四国の3大学が連携した学習プログラム）において、農村歌舞伎の化粧体験、歌舞伎体験、中山舞台での現代劇の企画・上演などの行事に参加し、中山を学ぶとともに地域貢献を果たしている。

(2) 伝統行事「虫送り」の復活

2011年に公開され日本アカデミー賞で10冠を受賞した映画『八日目の蝉』のロケ地となり、映画の重要なシーンの撮影で千枚田での「虫送り」が再現されたことをきっかけに、地元の手によって、途絶えていた伝統行事「虫送り」を復活させた。

虫送りについても、虫送りに使用する火手づくりなどの行事に、大学生も参加いただき、関係人口の増加に寄与している。



写真9 復活した伝統行事「虫送り」

(3) 棚田の美しい景色と現代アートの融合

近年では、瀬戸内海の島々を舞台に3年に一度開催される現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭」の開催地になり、芸術家と地元の有志が協力し、棚田の美しい景色と現代アートの融合をテーマに、地元の竹を用いて制作した作品が、国内外で脚光を浴びている。

竹の確保は主に地元住民が行い、作品の制作は、同芸術祭を支えるボランティア団体「こえび隊」が、竹切りから制作作業までをサポートし、作品と併せて中山地区の魅力を国内外に向けて広くPRしている。



写真10 棚田と現代アートの融合

(4) 棚田を守るため、世界に向けての魅力発信

令和3年10月、持続可能な観光地の国際的な認証団体であるグリーン・デスティネーションズが実施する表彰制度「世界の持続可能な観光地TOP100選」の2021年版に、日本からは12の地域が選出され、中四国では小豆島町が唯一選出された。

この中で中山地区は、地元が大切に守ってきた文化・景観から、国内外から多くの観光客が訪れるようになる中、観光客が耕作地等に入らないよう案内看板を設置するなど、そこに暮らす人々の生活と観光の間にお互いを思いやる一定の距離が芽生え、観光の賑わいを維持しながら地域の景観や文化を守る「グッド・プラクティス・ストーリー」が世界に認められた。



写真11 世界に向けての魅力発信

(5) 移住・定住の促進活動

定住人口の増加に向け、移住を所管する小豆島町住まい政策課や小豆島への移住を支援するNPO法人「T o t i e (トティエ)」と連携し、地区内にある空き家を空き家バンクに登録するなど移住を促進している。

移住者の中には、豊富な森林資源を活用した炭焼きや、社会問題となっている有害鳥獣（シカ）の革製品の作家もおり、地区の活性化に大きく貢献している。



写真12 シカ等の革製品